

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 ルーズビハーン・バクリーの神秘思想

氏名 井上 貴恵

本研究は12世紀、イラン南部の都市シーラーズで活躍したスーフィー、ルーズビハーン・バクリー・シーラーズィー (d. 1209) の思想について論じたものである。ルーズビハーンはスーフィズム史初期に活躍した禁欲主義者やスーフィーらの「酔語」と呼ばれる忘我状態で発せられた大胆な発言を好む傾向を見せたことから「酔語の師」との異名でも知られる。また酔語と同じく、ルーズビハーン思想の特徴としてしばしば指摘されるのが「愛」に関する議論である。とりわけ先行研究においてルーズビハーンは、神への愛についての議論を特に好んだスーフィーであるとの評価がなされることが多く、彼が愛について論じた『愛する者たちのジャスミンの書』は、彼の代表作として今に伝わっている。結果、ルーズビハーン思想は、神とスーフィーとの間に生じる合一体験の境地を究極的な理想とし、神への愛を謳う陶酔的な傾向を有するとの見解が主流となった。

こうした見解はルーズビハーン思想研究に先鞭をつけた東洋学者、アンリ・コルバンらの影響下にあることが指摘できる。コルバンが提唱したいわゆる「イラン的スーフィズム」(le sufism iranien) という思想潮流の区分は、ハッラージュ (d. 922) やバスターミー (d. 874/7) を初めとする陶酔的な議論を好んだスーフィーの多くをこの枠組みの中に位置づけるものである。ルーズビハーン作品の中にも陶酔的テーマが散見されることから、彼の思想もまたイラン的スーフィズムに分類されてきたのである。事実ルーズビハーンの著作には、こうした主題を語った作品も多い。しかしながら、残存するルーズビハーンの著作を分類したところによれば、ルーズビハーンはタフスィール学、法学、神学など8つの学問分野に関し、計44冊もの著作を残しており、陶酔的な事項のみを好んではないことは明白であり、イラン的スーフィズムという枠組みの問題点を浮き彫りにしている。

本研究はこうした問題を克服すべく、従来のルーズビハーン思想に対する評価を批判的に検討し、新たな視座からルーズビハーン思想の再検討を行う。その上で、ルーズビハーン思想の有する傾向を今一度整理し、ルーズビハーン思想をスーフィズム思想史というより俯瞰的立場から位置づける際の一助となることを目指す。

ルーズビハーンの活躍した時代は、スーフィズム思想史という観点から見ても

重要な過渡期にあったと筆者は考える。彼の活躍した 1100 年代後半から 1200 年代は、スーフィズム思想の大家、イブン・アラビー (d. 1240) が登場する時期とほぼ同時期に当たるからである。先行研究においては、イラン的スーフィズムという区分に分類される多くのスーフィーの思想とイブン・アラビー思想との関係を論じたものは少ない。本研究はこのような研究史的背景を踏まえ、最終的にはスーフィズム思想史における一大転換点であったイブン・アラビーの思想に関し、ルーズビハーンの神秘思想との連関の可能性を提示し、ルーズビハーン思想と後世のスーフィズム思想史との関係性についても新たな見解を得ようとする試みである。

上記 2 点の目的を達成すべく、本研究は以下のように構成される。まずは第 1 章においてルーズビハーンに関する基礎的情報を提供したのち、第 2 章から第 4 章においてルーズビハーンの代表的作品を基にその思想を再検討する。第 4 章までの結論を基に、第 5 章ではルーズビハーン思想の核となる事項を新たに設定し、イブン・アラビー思想と比較することで、両思想の関係性を明らかにする。第 6 章では、ルーズビハーンの名を冠したルーズビハーン教団について論じ、その思想の後世への波及の様子を考察する。

本研究の核となる第 2 章から第 5 章の検討の結果得られた知見は以下である。

第 2 章の検討から判明したことは次の 3 点である。まず、ルーズビハーンは酔語をクルアーンやハディースに基づく正統な言説であると捉えており、酔語の正統性を証明しようと試みていた。また酔語とクルアーン、ハディースはその表現形態が異なるに過ぎない 3 種であるという彼の言説には、酔語は神に選ばれた者が神との合一の結果発する特別な言葉であるという含意もある。ルーズビハーンは神や預言者も酔語を発するとしており、酔語現象の源を神や預言者にまで帰そうとする姿勢が見られるのである。そして 3 点目は『酔語注解』とハッラージュとの関係である。ルーズビハーンは、同書のプロローグにおいてハッラージュの言説の正しい理解を促すべく執筆を開始したと記しており、酔語を通しハッラージュ思想を再解釈・再評価するという目的を有している。しかしながらルーズビハーンはハッラージュ思想を全面的に受容し、称揚しているわけではなかった。例えばルーズビハーンは、ハッラージュの「イブリース崇拜論」を否定している。ルーズビハーンは自説との間に齟齬のある場合にはハッラージュの見解を否定するという態度を見せているのであり、これはルーズビハーンが、創造に先立つ神による特別な個人の選びの有無というエリート意識を重視している故である。つまり、ルーズビハーンにとってイブリースは太初に神に選ばれた選良ではなく、よってイブリースは敬意の対象ではないのである。

第 3 章では、前章において明らかとなったルーズビハーンのエリート意識に着

目した。彼のエリート意識は、預言者・聖者論において顕著である。そもそもルーズビハーンが預言者や聖者と呼ばれる人々の優越を説く理由は、彼自身が幼い頃から預言者や聖者であるというヴィジョン（幻視）体験をした故であると考えられる。ルーズビハーンの預言者、聖者としての自意識は彼の自伝である『神秘の開示』に明らかである。

神秘体験に恵まれたルーズビハーンは、スーフィーではあったが、基本的に人間の側から神へのアプローチに関して否定的であった。しかしながら通常、スーフィズムの教義においては、修行など人間側の神に対する努力の過程が重視される。ルーズビハーンもスーフィー道への入門書である『聖性に関する論稿』や『靈魂たちの清泉』においては、伝統的とされるスーフィズムの教義を踏襲する姿勢を見せてはいるが、一方自伝においては、ヴィジョンに基づく自身の個人的な神秘体験を修行の道における神秘階梯であるとし、神の選良だけが歩む特別な道であるとしている。ルーズビハーンの神秘階梯論や修行論には、最下位に位置する入門者と、最上位にある神の選良との間に、太初における神による選びの有無という絶対的な断絶が想定されており、それはたとえ入門者に向けた教本のような類の作品であっても一貫しているのである。

続く第4章では以下を明らかにした。愛に関する議論において、ルーズビハーンは愛（イシュク）という用語への強いこだわりを見せ、人的愛から神的愛への連関を主張している。ルーズビハーンの愛の議論においては、人的愛は神的愛へと至る訓育の段階と考えられ、この段階を経ることで人的愛は神的愛へと昇華されるという議論が展開される。しかしながらやはり、人的愛から神的愛への移行は神の選良のみに許された特別な方法であるとルーズビハーンは述べており、こうした神の選良に起こり得る現象として愛や酔語、美は存在するという。確かにルーズビハーンの愛の議論は、イシュクの用法などに見られるように、異端的な要素を敢えて含むという点に関してはハッラージュ由来の思想を受け継いでいる。と同時に、太初に始まる神の選良と神との関係性から愛の議論を説いた彼の「愛の理論」は存在論的な傾向をも見せており、この点に関しルーズビハーンの愛の理論はイブン・アラビーの存在一性論的傾向に近い。ハッラージュからイブン・アラビーに至る一連の思想史の流れの中でルーズビハーン思想を捉え直すという視点が必要であると言えよう。

第4章までの検討をうけ、筆者はルーズビハーン思想において軸となるのはヴィジョン、預言者・聖者論、神と人との存在論的連関の3点であると考え、第5章においてはこの3点からルーズビハーン思想を整理した上でイブン・アラビー思想との繋がりについて考察した。結果、ヴィジョンを通じた預言者的遺産の聖者への継承という見解はイブン・アラビー思想においても見受けられ、更に詳細

な検討が加えられていることが判明した。イブン・アラビーもまたヴィジョンによって自身の預言者・聖者性に気付き、最終的に神と自分、神と人との深淵な連関を主張している。イブン・アラビー思想においてもヴィジョンは神の選良の徴なのであり、自身の高い預言者性や聖者性を保証するものとして認識されていた。ヴィジョンを通して特別な意識を開かれた者は、神の似姿に創られた人間と神との連関を見出すことが出来、時に神的美を、神の顕現として現世に現れた美しい人の中に見出すのである。人的美の中に隠された神を見出し、愛するという方法は、そのような意味で選良だけに許された行為だと言える。以上の通り人的愛と神的美との連関はイブン・アラビー思想においても存在しており、神と人との存在論的観点からルーズビハーン思想とイブン・アラビー思想との連関の可能性を見出すことが可能なのである。

以上、ルーズビハーン思想をヴィジョン、預言者・聖者論、神と人との存在論的連関という新たな観点から検討した結果、ルーズビハーン思想のスーフィズム思想史における位置づけに関し新たな知見を得ることが出来たと筆者は考える。つまり、ルーズビハーン思想はいわゆるイラン的スーフィズムの枠組みを超え、ハッラージュから始まるいわゆる陶酔的なスーフィズム思想が、イブン・アラビー思想の潮流へと徐々に混交していく過渡期に位置づけられる思想と言えるのである。